

# 新聞小説と坪内逍遙

——読売新聞を読んで——

本 田 康 雄

要 旨 日本新聞は総発行部数において自由主義諸国中の第一位であり、一社あたりの総発行部数は読売新聞の約一千万部が世界最高である。そして中央紙、地方紙を問わず日本の新聞には絵入りの新聞小説が朝・夕刊に掲載されている(序)。これは明治のはじめ東京絵入新聞などの小新聞(大衆紙)の雑報欄に生じた所謂三面記事の連載にはじまり(一)、雑報記事の連載、これが虚実相半ばする実話から記事の形を採る創作へ展開して読者の人気を得た(二)、所謂「続きもの」。坪内逍遙は読売新聞(改進黨系)において紙面の改革を断行し、雑報記事を綴り合せた様な続きものを廃し、別に小説欄を新設した。明治十九年一月より『鍛鐵場の主人』(フランスのジュールジュオネー原作、加藤瓢平訳)、ついで『当世商人気質』(饗庭篁村)を連載した。小説の書き手として尾崎紅葉、幸田露伴が入社し、文壇に紅露時代が成立することとなった(三)、新聞小説と坪内逍遙。坪内逍遙の小説欄の改革は、明治十八年に発表した『小説神髓』の理論に基づくもので江戸時代以来の我国の道徳的文学観と文化の構造に変更を迫るものであった(おわりに——坪内逍遙の小説観)。

## 序

日本は今日、世界第一の発行部数を持つ新聞大国でもある。『ユネスコ文化統計年鑑』によれば一九八四年現在、日本の新聞の総発行部数は六八一九万部で自由主義諸国中の最大の発行部数である。また普及率でも一人あたり五百七十五部で自由主義諸国中の第一位である。<sup>(1)</sup>この中で総発行部数約一千万部の読売新聞が日本最大、つまり世界最大の発行部数を持つ巨大な新聞社なのである。そして、日本の新聞界においては読売新聞、朝日新聞、毎日新聞といった全国紙は各県で発行されている地方紙と激しい競争を続けている。地方在住の購読者にとっては毎日、先ず地元新聞を閲読する必要がある、余裕のある人が重ねて中央紙を購読するという習慣がある。明治以来の伝統のあるすぐれた多数の地元紙が中央紙以上に活動していることが注目されるのである。

さらに、中央紙、地方紙を問わず朝刊にも夕刊にも社会面の下段に挿絵入りの新聞小説が掲載されていて、これが日本の新聞の珍らしい特徴となっている。すべて同じ形態で、題名の下に作者名と画家名が並び、二段組みあるいは一段組み、字数は四百字詰原稿用紙で三枚弱、全スペースの中央三分の一は挿絵である。

私はこれまでにこの新聞小説の形態について江戸の文芸、文化からの流れに注目していくつかの小論を発表してきた。<sup>(2)</sup>今回は明治初期の読売新聞をあら／＼通読したので、これまでの考察に加えて主として同紙の記事から問題とすべき点を拾ってみたい。

読売新聞は明治七年十一月二日、東京虎之門外琴平町一番地、日就社において創刊された。縦二十六糎、横三十五糎の半紙大用紙両面刷りで上下二段を左の欄に分けて<sup>(3)</sup>いる。

「布告」<sup>おそれ</sup>「裁判」<sup>がまばき</sup>「新聞」<sup>しんぶん</sup>「説話」<sup>はなし</sup>「投書」<sup>よせがみ</sup>「稟告」<sup>しんせ</sup>（広告欄）がそれであり、「新聞」欄が一番多くのスペースを占めている。読売新聞の場合はこの「新聞」欄が他紙の雑報欄にあたり、「説話」欄は解説記事である。

読売新聞は郵便報知新聞、東京日日新聞、朝野新聞などの大新聞が政論を主とし、知識人層を対象としたのに対し、口語体で分り易い記事を書いて庶民層の読者を狙った。小新聞の元祖である。明治十二年二月に「読売雑聞」の欄が設けられるまでは社説もなかった。社名「読売」は江戸時代の瓦版の「読み売り」の意で庶民層の親しみやすさを意図したのである。明治八年七月八日の「説話」欄に、先に投書で、「読売」という紙名は拙ない、早く名を替えよ……という意見があったのに対して

……此国で昔より読売というものが（香具師仲間では新報を歩行ながら呼ゆえ呼売と云棒砂糖のやうな笠を冠って大津絵や一ツとせを読でうる読売と唱へますは仲間の外では誰も知りません）新聞を広めるため売って歩いたは西洋人の来ない前から有りまじやうしてみると此読売は日本しんぶんの濫觴でございます。

と解説している。読売新聞は江戸庶民の情報紙であった瓦版の流れを受継ぐものであり、記事の中心は「新聞」欄の所謂三面記事であった。

### 一 雑報記事の連載

読売新聞の新聞欄において、明治九年頃から記事の分量が多くなると、「明日」へ続ける二回連載の雑報記事がみえる様になる。一例を挙げれば明治九年十一月二十四日（第五百五十二号）、同二十五日（第五百五十三号）に次の記事がある。

（要旨）（十一月二十四日）「五百三十四号の新聞に一寸出しましたが」と断ってお藤殺しの記事が掲載されてい

る。お藤は筑前の生まれで内藤新宿の娼妓であった。請出されて西の窪巴町の貸本屋忠太夫の女房となったが江州産れの番頭の久兵衛と深い仲となり、夫が借金のため身をかくしたのをよいことに、浮気を続ける。お藤は人目もあるので久兵衛に新柴町へ世帯を持たせ、お銀という女房を貰って暮らせることとし、実は久兵衛との逢瀬を続けるため一切を入れ揚げて尽くした。

そのうちにお藤は金もなくなり困り果て、久兵衛に十五円金の策をたのむ。その途端に久兵衛はお藤がうるさくなり、板橋の知り合いのところへ金策に行こうとよい加減なことをいってあちこち連れて廻った挙句、夜になって本性を顯し「こゝまで来たは他でもない殺してしまふ覚悟だ」と短刀を振りかざす。文末に「オ、ツイこんに長くなりました此あとは明日まで御猶予」とある。

(十一月二十五日) 冒頭に「昨日はうか／＼長く書いて皆さんへ御退屈の思ひをさせたお藤殺し……」とある。久兵衛は十円や二十円に差支える女に用はないとなぶり殺して、お藤の縮めていた紫縮緬の帯と巾着を奪い急ぎ新柴町の家へ帰る。女房お銀の実家上州駒形在の小屋原村の内田新蔵の家へ逃げるため小網町より蒸気船へのり首尾よく新蔵の家へ着いた。しかし、程なく其筋よりお手が廻り縄にかかって東京へ送られた。

この様な犯罪、情痴事件の雑報記事の連載がのちの所謂「統きもの」に繋がるとみられる。単なる記事の連載といふだけなら、「岸田吟香先生の眼のおはなし」(明治八年十月三十日～十一月四日)、高島藍泉述の「説話」(明治九年一月十八日～十九日)などあるが特に問題にするに及ぶまい。警察で取材した事件の報道の連載に注目したい。(5)

この種の雑報記事の連載は読売新聞以下の小新聞において流行し、特に東京絵入新聞は記事に草双紙風(瓦版風)に挿絵を入れたので好評であった。これがのちの新聞小説の挿絵に繋がると考えられるが、順を追って説明してみたい。

最近起った犯罪、情痴事件等の報道が好評で、分量の多いものは二回連載となったが、この連載形式に新しい流行を起したのは「かなよみ」新聞の「鳥追いお松の傳」であった。この記事は明治十年十二月十日より翌十一年一月十一日まで十四回にわたって掲載された。同じ年、明治十年二月九日に狂死した毒婦・鳥追いお松の一代記である。普通の雑報記事（ニュース）の取材と異って実録によったものであるが、しかし時間的に近い同年の事件で、また一々この毒婦が起した事件の年月日を明示して新聞記事の書き方になっている。近日中に起った事件の報道に準じて近い時期の事件の実録を読みものとして連載したのである。

この連載記事は明治十一年一月十一日（第十四回・最終回）で中断したが、この日の記事の文末に

記者曰 お松の伝は存外に永くなり看客も余り退屈したから最よい加減に結局にしたらとお小言の寄書もあり是からお松が最期の場合までは六七年の長物語で一度浪花に栄華の夢の儂こぼれまいはひ 倅折柄新平民の御布令大坂吉と再会より猶又悪事は千里に走り竹藪の濱田殺し夫より東京へ戻りて奇病を病むの一条は彼忠蔵が情の愁嘆場汐入堤の旧巢に帰り大團円を結ぶ迄は別段に戯作風の読本にして挿絵を加へ「鳥追お松海上新話」といふ外題にて近日発売する積りですから先新聞では今日が大話と致します囁看客お見倦の段は何卒おゆるしを願ひます

とあり、この予告通り草双紙合巻『鳥追お松海上新話』（三編九冊、仮名垣魯文閱、久保田彦作、陽州齋周延画）が二月から三月にかけて錦栄堂から出版された。仮名垣魯文は小新聞の雑報記事に実録を適用し、またその新聞記事を「挿絵を加へ」て「戯作風の読本」、つまり草双紙合巻として売出したのである。新聞の「雑報記事」と「実録」また「草双紙合巻」の三者が戯作者仮名垣魯文によって結びつけられた。この背景として、江戸時代に写本で行われた「実録」「秘録」の類・「風説」「噂話」「見聞録」、また瓦版の情報活動、ある種の「読本」や「草双紙合巻」はこの種の情報や資料に基づいて作成されたこと等を想起することも許されるであろう。実録が新聞記事として連載され、ま

た伝統的な絵本「草双紙合巻」としても刊行されたのである。

『鳥追お松海上新話』は

我仮名読新聞第五百四十号客歳十二月十日を以て始めて雑報欄内に記載せし鳥追阿松の伝は間々本年一月十一日第五百六十二号に到り嗣出する事十四回未だ結局に及はざるも僥倖にして千町万町の衆目に触れ喝菜の声価を得たる操觚者の歓喜の余りに思はず筆を走たるなり……遙かに過去し明治元年の春よりして同十年の冬に止る温故知新の大実録……(自序、明治十一年第一月仮名垣魯文記)

とある様に新聞記事をもとに阿松の一代記を書いたものである。十四回にわたって書き継がれた「鳥追いお松の伝」は記者、仮名垣魯文によって潤色が加えられているであらうがあくまで雑報欄の新聞記事であった。ニュースがそのまゝ草双紙合巻となったのである。新聞記事を浮世絵に仕立てたものを「新聞錦絵」と称したのになぞらえれば新聞合巻と呼ぶのが適当だろう。

本書刊行と同年、明治十一年六月から十一月にかけて草双紙合巻『夜嵐阿衣花廼仇夢』(五編十五冊、芳川俊雄閱、岡本勘造綴、永島孟齋画、金松堂刊)が刊行された。これは「さきかけ」新聞の雑報記事の連載「毒婦阿衣の伝」を合巻に仕立てたものである。「初篇」緒言に

我さきかけ新聞第三百廿号(本年五月廿八日)の紙上を以て其発端を説起し号を逐て連日掲来りし毒婦阿衣の伝は其実録に拠て余が戯れに筆を走らせしに図らず看客の喝菜を蒙り新紙の発売多を加ふるの栄を得たり……数条の珍説奇談多端に涉り新聞の紙面に悉す能はざるのみならず……金松堂の主人がこれに応じ半途にして紙上の掲載を止め岡本子をして之を双紙に綴らせ爰に初編を発売せり……明治十一年六月 芳川俊雄記

とある様に明治五年二月二十日に処刑された原田キヌの実録を連載した新聞記事を合巻に仕立てたものである。

因に、明治五年二月二十二日の「東京新聞」に夜嵐お絹の捨札の写しとその評言が掲載されていることを篠田鈺造氏が紹介されている。『明治新聞奇談』「夜嵐お絹の捨札写」

東京府官族小林金兵衛妾ニテ浅草駒形町四番地借店 原田キヌ 歳二十九

此者儀妾ノ身分ニテ嵐璃鶴ト密通ノ上主人金兵衛ヲ毒殺ニ及ブ段不届至極ニ付浅草に於テ梟木(さらし首の事)ニ行フ者也

右は二十日御仕置となり昨二十二日迄三日間の間同処に晒しありたり猶璃鶴の処置は次号に出す 評者云 此婦玉貌李妃西施を欺き美声は頻伽の如し然而して其姦既にかくの如し実に恐る可し実に恐る可きは毒婦の媚なり 璃鶴亦すこぶる美少年なり往々数婦をまよはす絹つい是に及べり溺者は必ず影響す唯遅速あるのみ

蛇喰ふと聞けば怖し雉子の声

明治五年二月二十日の御仕置から「さきかけ新聞」に連載された明治十一年五月二十八日まで六年以上の時間の隔りがあるが、『鳥追阿松の伝』(仮名読新聞)の成功に便乗して敢えて実録を雑報記事に適用したものである。前述した合巻『夜嵐於衣花廻仇夢』緒言で、「さきかけ新聞」に連載した「毒婦阿衣の伝は其実録に拠て余が戯れに筆を走らせしに……」と述べているのも実録の利用を読者に明示したものと受取りたい。

以上のように『鳥追阿松の伝』や『毒婦阿衣の伝』の流行は雑報欄中の連載記事(続きもの)を興味ある読物とした。続き物の流行が始まったのである。読者の人気はこの実録風、草双紙合巻風の連載記事に集中した。

この種の続き物の流行に刺戟された「東京絵入新聞」の染崎延房(二世為永春水)はこの新聞の目玉である絵入り雑報記事に新たな工夫を加えた。近日中に起った事件の雑報記事であっても統報の形で回を重ね絵入りの連載の物語に仕立てたのである。明治十一年八月二十一日から十七回にわたって連載された「金之助のはなし」がそれであって

好評を博した。この記事については拙稿<sup>(7)</sup>でも触れたので重複するが、江戸の新右衛門町の小道具屋の次男・染谷金之助という美男（十九歳）の人情本風の実話物語である。数寄屋町の小蝶（十八歳）という芸者とよい仲となつて放蕩の挙句、家を勘当され一時は金につまんで自殺しようとしたが、小蝶に励まされて大阪で生活をたて直そうとする。お供の悪番頭にだまされて一文無しとなつたが、北の新地の芸者小龍に助けられ、西京新聞の呼び売りとなつて真面目な生活を送る。その堅気の生活の様子が東京にも伝わり親許から勘当を許される。そこで小龍には礼を尽して別れ、東京へ帰つて小蝶を妻として商売に励む、という筋である。金之助という極く普通の人物の素行を「昨日の絵入金之助の続き」（冒頭）「以下、次号」（文末）といった風に連載の続き物に仕立てている。読者は東京絵入新聞の雑報欄で毎日、金之助の実話を絵入りで鑑賞した訳である。『鳥追阿松の伝』や『毒婦阿衣の伝』が実録風、草双紙合巻風の続き物であるとすれば、これは人情本風の続き物であつた。この明治十一年において小新聞の雑報欄に江戸の戯作が復活した観がある。新聞記者の側からいへば仮名垣魯文、芳川俊雄また染崎延房がこの流行を起したのである。

この様な小新聞界の状況の中で翌明治十二年一月三十一日、毒婦・高橋おでんが死刑に処せられるという事件が起つた。「東京絵入新聞」はその日（明治十二年一月三十一日）に「兼く府下に其噂高き毒婦高橋おでんはいよ／＼今日は御処刑になるとか伝へ聞きましたが去明治九年八月浅草蔵前の旗店丸竹の家にて後藤吉蔵を殺害せしとき絵入にて概略説明しましたが、<sup>(8)</sup>猶其履歴の委しく聞込たる事もあれば明日より引続て御覧に入ませう」と報じ、明二月一日より二十一日まで十五回にわたつて絵入雑報記事「毒婦お傳のはなし」として連載した。記事は二面または三面に中央に挿絵を入れて掲載されている。

他紙の状況をうかがつてみよう。「仮名読新聞」（社長は仮名垣魯文）は二月一日（土）、二日（日）と連載した。二月二日の記事は「毒婦おでんの話し昨日の続き」に始まり、文末は「……この納りは如何なるかまた例の明後日」<sup>(9)</sup>



となっているが、その二月四日(火)の雑報欄にはこの記事は見当らず、「広告欄」に左の広告が掲載されている。

高橋阿伝夜叉譚 初編三冊絵入読本中形双紙 仮名垣魯文操觚・守川周重畫 二月中旬初編発売 日本橋区横山

町三丁目金松堂辻岡屋文助版

そして、この広告の通り草双紙合巻『高橋阿伝夜叉譚』(ママ) (たかはしおでん) (やしやものがたり) (仮名垣魯文作、守川周重画) 初編〆八編(二十四冊)が二月十三日より四月二十二日にわたり刊行されたのである。

次に「東京新聞」は二月一日より、おでんの一代記を連載し始めたが、やはり合巻『東京奇聞』の出版に切り替えた。『東京奇聞』初編〆七編(各編三冊、各冊九丁)が芳川俊雄閱、岡本勘造作、桜齋房種画で明治十二年二月十一日から四月十五日にわたり、島鮮堂・網島亀吉から刊行された。本書の出版は仮名垣魯文の『高橋阿伝夜叉物語』と競合して行われたものであり、七編の序文(芳川春濤)にも「類板の世に出るを以書肆発売を急ぎ全部七帙僅か六旬にして業を卒ふ」と述べている。新聞記事による際物の合巻として両者出版のスピードを競ったのである。

「読売新聞」は明治十二年二月一日より二月六日まで五回にわたりお伝の記事を連載した。お伝の伝記、殺人に至る一部始終を述べ、最終回に一月三十一日の東京裁判所の判決の文書を掲げている。

高橋おでんの殺人事件を連載した右の四紙の動向を考えてみたい。「仮名読新聞」と「東京新聞」は何故、速報性のある新聞記事の連載を中止して合巻の出版に切換えたのであろうか。このことについては絵入雑報記事の連載を続けた「東京絵入新聞」と比較して考える必要がある。落合芳幾の挿絵と染崎延房の記事と連携した「東京絵入新聞」の絵入雑報の面白さが挿絵のない他紙を圧倒したのではないだろうか。「仮名読新聞」「東京新聞」は結局、合巻という江戸時代からの出版形態の単行本の刊行に切換えたのである。この時期まではまだ合巻の流行があり、この二種の合巻は有名であるが、明治期の合巻という出版形態は明治十年代を以て終了する江戸文芸の末期の衰弱した出版活動

の最期の足掻きであつて「東京絵入新聞」の絵入り雑報記事に対抗出来なかつた。高橋お伝の画像を中心に書きこまれた雑報欄は、さながら合巻の見開き一コマ（一丁分）が新聞紙の紙面に投影された観があり、これに速報性のある記述、例えば「昨日から続いて新聞へ出す高橋お傳の死骸を浅草の警視第五病院で解剖ふたわされます」（二月四日の記事より）が加わつて読者の好奇心に訴える読み物となつたのである。江戸の出版形態ならば定めし高橋おでんの錦絵や合巻が半年か一年かゝつて版行されるところを、新聞で毎日、絵入り雑報記事を提供したのである。

以上、絵入雑報の連載を続けた派手な「東京絵入新聞」、連載を中止して合巻出版に切換えた「仮名読新聞」「東京新聞」に対して「読売新聞」は淡々として「お傳の話」を五回にわたつて連載した。小新聞の代表紙「読売新聞」の地味な行き方が察せられる。しかし、明治十一年から十二年にかけて、「金之助のはなし」や「毒婦お傳のはなし」を通して「東京絵入新聞」の絵入雑報の連載は圧倒的な人気を得て他紙を引離したのである。

## 二 所謂「続きもの」

「……つい数年前までは新聞社員はおのれの新聞が連載している『小説』を小説とはいわずに『続き物』といつていた。毎日続くから『続き物』にはちがいないが、これは大作家の『名作』に対してなんと礼を失した呼び方であることか。……」と高木健夫氏は述べている。（『新聞小説史稿 一』『著者後記』昭和三十九年四月、三五社刊）

「続きもの」とは新聞小説を呼ぶ新聞社の用語であつた。しかし、本稿の様に、「続きもの」の実態乃至この呼称の生まれてくる背景を歴史的に眺めてみると、主として第三面の雑報記事の連載と深い関りがある様である。それははじめ実際の事件の報道が一回では済まずに二回にわたることから始まり、次いで「鳥追お松」「夜嵐お絹」「高橋おでん」の場合の様に実際の犯罪事件乃至その実録に取材し、創作をまじえて連載の長篇の物語に仕立てる様になつた。

また大きな犯罪事件でなくとも「金之助のはなし」は、第三面によく掲載される情痴事件、窃盗、詐欺等の軽犯罪乃至町のうわさばなしになぞらえて、この放蕩息子の行状を面白く可笑しく人情本風の物語に仕立てたもので、以後「金之助」風の続きものが流行する様になった。これは社会の事件を報ずる雑報記事の形式に擬した一種の創作とみるべきであろう。

そしてこれらの続きものには、この頃までは表題(作品名)、作者名、また回数が表示がなかった。記事の冒頭にある「某々のはなし」というのは「雑報」欄中の記事であることを意味する一般的、便宜的な題として親しまれてきたが純粹に作品(物語)のテーマを示す題とはいえない。

明治十二年六月の東京絵入新聞に「田舎裁縫鯉染衣」<sup>(10)</sup>「回数」を題名とし、「古川魁雷子稿」と署名のある連載の絵入雑報記事がはじめて登場した。この作品は六月八日(第一回)より七月十七日(第二十回)まで連載されたもので、内容はともかく形式は現在の新聞小説の形態を完備している。この物語の女主人は島根県通摩郡大森宿の老舗の小間物屋の娘、主人公類平はその先隣のさる大店の番頭を勤める橋本屋友造の長男である。(雑報記事風に何時、何処で、誰れが、何を、如何にというニュースの書き方である。)この相思相愛の二人が親に結婚を許されなかったことから様々の事件が起る。詳しい梗概は旧稿に述べたので参照されたい。最終回の文末は「……奇しき縁の噂から過にし事の洩聞えて斯は紙上に今日まで記綴る事となりしも深き由縁のある事ならんと愛度爰に局を結べど廻らぬ筆のしつけ麻に裁縫あげたるものなればお氣に入らぬは幾重にも御海怨希ふと伏してのぶる(大尾)」と結ぶ。何かの事件の材料、町の噂話等があったのかどうか不明であるが、大部分は創作であろう。この「田舎裁縫鯉染衣」に続いて東京絵入新聞では、同じ明治十二年に「末露結商茅」<sup>(11)</sup>(横浜鱸孝報、七月二十四日～二十六日、三回)、「岩ねのきく」(無署名、八月三十日～九月二十日、十三回)、翌明治十三年に「野路の花」<sup>(12)</sup>(子謙粹史報、二月十七日～五月九日、四

十五回)、「離の菊」(魁蕾子稿、八月三日?九月二十二日、四十回)、「郊外の若草」(無署名、十月六日?十九日、一回)、「渋谷家興敗の顛末」(魁蕾子、十月二十八日?十一月十八日、十回)、「覚ての夢」(転々堂主人(藍泉)稿、十月二十四日?十二月二十五日、十五回)などが発表されている。

このように作品のテーマを示す題目に作者の署名、また回数をつけた続きもの、つまり現在の新聞小説と同じ形態が現れるのは明治十二年からのようで、「かなよみ」<sup>(13)</sup>新聞の場合は同年六月十二日から掲載された「薪樵恋の山道」(倭仮名報)が最初で、以後「毛並深雪三絃駒澤／新編朝顔日記」、「鄙土産梅花一枝」(孤蝶園主稿)、「昔時萬延情話」、「仇桜恋夜嵐」(千東北洲稿)、「実父ハ米国継母ハ日本／捨兒舟暴浪奇聞」などの連載が六月から九月までに散見される。以後も同様である。

一方、「読売新聞」は小新聞の中では上品さを誇りとし、大新聞の社説に準ずる「読売雑談」の欄があつて格調高く、この種の創作の続きものは掲載しなかつた。しかし、明治十八年頃ともなると時の流行に抗し難く、続きものを掲載し始めた。これがいづれ明治十九年の読売新聞の小説欄の独立へ繋つてゆくのである。読売新聞の続きもの二、三を紹介してみよう。

「伯父の遺物」は明治十八年十月二十一日、第一回より同年十一月十一日第十八回まで掲載された。

(梗概) 滋賀県長浜の町に大橋吉兵衛という人物がいた。姪のお浅(二十歳)はこの家にひきとられて育つたが、この伯父が吝嗇なのに耐えかねて同地のお元という伯母の家へ移り糸繰りの手伝いをしていた。叔母の家族は冷たい人たちであつたが、二番目の息子の益蔵(二十四歳)が親切にしてくれた。

お浅は益蔵に頼んで京都の綾錦の繰織の家へ奉公することになり明治十三年三月一日に出立した。お浅はよく働いて主人から喜ばれた。その年の暮、ある女がお浅をたずねてくる。この女は夫に棄てられ病身で乳呑児を抱

えて貧苦の生活をしている。（実はこの女はお浅の伯父吉兵衛の娘でお梅という。吉兵衛がこの娘と孫の世話を  
お浅に依頼したことが最終回で分る筋立てになっている。）お浅はなにくれとお梅親子の面倒をみたが、運つた  
なくお梅、病死する。お浅はお梅の子供をひきとり、里親に預けて働いたが、主人からお浅の児ではないかと疑  
われる。主人への申開らきのため伯父・吉兵衛と相談するといつて長浜へ行ったが、長浜到着の直前に伯父は没  
していた。

葬式の後、差配の久助が親せき一同に吉兵衛の遺書を示す。それによると全財産をお浅に譲り渡す、但し幼い  
ので聳を迎えるまで久助を後見人に頼むとあった。お浅心労で病氣となった。そこへ、京都の主人から飛脚で、  
約束の日限を過ぎても帰らぬからと解雇の知らせと手荷物を返却してきた。また、京の里親のところから預つて  
いた赤児を返しに来た。親せき一同はこの赤児の論議をはじめ忍び男ある女に吉兵衛の財産を譲ることは出来な  
いという。お浅は親切にしてくれた益蔵からも疑われる。ごた／＼が続いたが吉兵衛の一周忌に、臨終の際にお  
預けになったといつて下女が一通の書状を後見人に渡す。この書状により吉兵衛が娘、お梅とその娘の介抱をお  
浅に頼んだことが分る。お浅は皆のためを思い、全財産をお浅にとある遺言状を引裂き火鉢の中へ投げ込んだ。  
遺産は半分は親せきのお元親子に分けることとした。お浅は益蔵と結婚してこの小児を育て成長の後は吉兵衛の  
跡を継がせることにした。

以上の通り、地名と年月日を明示した雑報記事の書き方であるが、ほとんど全部創作であろう。しかし小新聞の所  
謂三面記事は単独の記事（ニュース）の場合も、虚実相半ばするものが多いので、その意味では情話・犯罪などの普  
通の雑報記事の連載と考えても大きな誤りはあるまい。

「毒殺裁判」は明治十八年十一月十二日第一回より同年同月二十五日第十回まで連載された。

(梗概) 浅草松葉町に住む山田末太郎(四十五歳)は病気が重く人事不省に陥っている。枕許には女房お清と年若き美人の下女おまるが座している。病人は急に眼を開き、妻お清を叱りつけ、おまるに向い自分の死後は蛇にかまねぬ用心をしると妻へのあてつけを言う。やがて末太郎は絶命した。妻お清は死体から算笥の鍵をとり、蔵の中の現金、貸金の証書など奪い取った。

近辺の髪結床での噂話によるとこの山田末太郎は西南戦争で戦死した友人の娘を引とって育てた。それがおまるであるとのこと。また、末太郎は一旦は棺桶くわんぼくに入れられたが娘が嫁入先から駈けつけて通夜の晩のぞいてみると、顔は薄赤く目を半分ほど開き眼球が光っている。しかし、身体は冷く確かに死んでいるので泣く娘を無理に引離して棺桶に入れたまま埋葬した。……とのことであった。

本所辺の末太郎の親せきはこの噂を聞いて死因を調べはじめた。かかりつけの医師は病死に間違いなしと言いつ張るので、死骸を取出して調べることになる。親せきの者は信頼出来る医者同道して墓地にいたり、棺桶をあける、医者は死体を見て変死に間違いなしという。この毒殺の噂が其筋へ聞え、お清、おまるはじめ家内一同、警察へ拘引され調べられたが、世間の噂とちがいお清でなくおまるが嫌疑をうけ、この十七、八歳の妙齡の美女一人留められて裁判となった。検事の差出した訴状によれば、おまるは末太郎と密通し、密に同人の死後五千元をおまるに与えるとの約束を認めさせた。そして末太郎が壮健で急に死にそうにないので毒を盛ったというのである。検察官は死刑を求刑した。しかし、優秀な弁護士が現われ、検察官より提出された劇薬の瓶が贗物であることを証明する。

おまるは末太郎の友人の子というのは偽りで実は末太郎が情婦に生ませた娘であった。末太郎は自分の死後困らぬ様におまるに五千元を与えようとしたのである。お清は末太郎がおまると密通していると邪推して毒殺した

のだ。お清、その旨、自白する。お清はお情けをもって死刑を許され、有苦役禁錮二十年に処せられた。

第一回の文末に「編者云 本篇は外国の話にして我国にありし事ならねど読者の便を謀り仮に土地人名等を似つらしき名に変えたるものなれば諸君其心して読み給へかし」とある様にこの作品は翻案で江戸の読本の手法である。一種の翻訳か。続きものといつても実際の事件に取材するものから、虚実相半ばするもの、またこの作品の様に全くの創作までかなりの幅がある。そのことが作者と読者の間の暗黙の了解事項、前提となつて、続きものが流行したのである。

この明治十八年の「読売新聞」にはなお、「舊の梅<sup>つばな</sup>」も連載され（十一月二十六日第一回より十二月十日第十三回まで。梗概省略）続きものが、他の小新聞と同様に盛行した様子がうかがわれる。続きものは挿絵入りの東京絵入新聞が断然他を引離して人気があつたが、挿絵なしでも読者を獲得するため小新聞に必須の魅力ある読みものであつた。しかし、読売新聞は同じ明治十八年末に至つてこの続きものを雑報欄から切離して、つまり他の諸々の雑報記事、ニュースとの縁を切つて、新しい概念である「小説」として、小説欄に独立させるといふ大改革を行った。これは坪内逍遙が指導したのである。

### 三 新聞小説と坪内逍遙

読売新聞、明治十八年十二月二十七日の「読売雑譚」欄に「新聞紙の小説」という題の一文がある。執筆者は聯画閑人・加藤瓢乎でこれまでも度々読売雑譚を書いた記者である。<sup>(14)</sup>この一文の説くところは極めて重要で、続きものが読売新聞において飛躍的に新聞小説に変質した秘密を明瞭に語っている。冒頭に

或る人閑人を語りて曰く足下等の従事する処の読売新聞に記載する処の統話しは殊更に奇異の説を構造し又は狼

藝の字句を挟む等の事なしと雖も其書く処のもの小説に類し然も趣意も無く寓意も無く唯事実を述るに過ぎれば此の如きものを他の雑件に混載せんよりは寧ろ純然たる小説を編述し之を別欄に記載するに如すと是甚だ正当の説にして閑人の大いに賞賛する処なり……

と述べる。書き出しの「或る人」とは坪内逍遙のことである。逍遙と読売新聞との関係については後述する。読売新聞は小新聞の中では社説に準ずる「読売雑譚」もあり、記事も上品で別格の位置を保っていた。勿論、「奇異の説」「猥褻の字句」によって読者の通俗的興味に訴える連載の続きものも元来は掲載しなかつたのである。しかし続きものの流行する大勢に抗し難く読者の獲得のため、前述した様に続きものの連載をはじめた。しかし、その内容は他の小新聞、特に挿絵入りの東京絵入新聞の様に大衆の劣情を刺戟する体のもではなく比較的上品な雑報記事の連載であった。「或る人」は、この読売新聞の続きもの、「唯事実を述るに過」ぎない雑報記事の連載に注文を付けて「趣意」「寓意」のある独立した「小説」に飛躍させることを計つたのである。念のため記しておけば、注文は二点ある。第一点は連載「小説」、つまり新聞小説の作成という本質の問題であり、第二点はこれまで雑報欄の中で他の雑報記事（ニュース）と並んで掲載された続きものをやめて、新たに独立した小説欄を設けるといふ新聞紙面の形態の改革である。結果としてはこの提言によって、事実の報道なのか創作なのか性格の曖昧であった続きものは消滅することになった。

この「或る人」の提言に聯面閑人は賛意を表し、読売新聞が時流に抗し難く、続きものの掲載に踏み切つたが、それも行き詰まっている現状を左の様に述べている。

……さりながら新聞紙もまた一の売品に過ぎざれば時流に投じ看官の意を迎へざるを得ざるなり且今我府内において如何なる新聞紙が最も世に行はるゝかを察するに……小新聞なるものに概ね統つとま話を以て記載物の重なる



ものとし之に大いなる絵画を挿入して紙面の央を填むる事往々あるも皆看客の愛媚を買んがためにして読む人も又堅くるしき論説等を見るよりハ柔かなる統話の方に目を注ぐ人多し故にこれと並び立ち共優劣を争ふ以上は我意に進まざるものなりとてみだりに斥けて採ざるが如きは策の得たるものに非ず左りとて陳腐猥褻なる統話を掲ぐるは記者の潔しとせざる処なるが故に探訪員の聞き得たるものうち誹毀ひきに涉らず猥褻に入らず読んで面白く益多きもののみを選んで記載する心得ながら或は小説に類し然らざれば其談話淡泊無味にして看官の喝采を得る事難し……

要するに挿話を入れた東京絵入新聞の犯罪・情痴事件の連載がストレートに多くの読者を獲得したのにくらべ、止むなく続きものの流行を受容れた小新聞の元祖・読売新聞の記者の中途半端なまた後ろめた執筆の苦心を訴えている。「故に或る人の云る如く此の如き小説類似の長物語を雑報欄に混載せんよりは寧ろ純然たる小説を別欄に登載するに如ず……」とある様に「或る人」の提言が救いとなったのであるが、なお、その実施にあたってはフランスなどの新聞界の実情も参照している様である。

……試みに其例を欧米の新聞紙に求たるに毎週発刊の新聞紙等には必ず小説を掲げ日々発刊の新聞紙と雖も其例少からず現に仏国のプチジュールナル（小新聞と云ふ意）の如きは日々の発刊にて紙面は其名の如く広大ならず我読売よりも一寸強も小き小新聞ながら日々其紙面の下段に二個づゝの小説を掲げ然も仏国内にありし事は大小もらさず記載するとの事大いに社会の信用厚く日々発刊の紙数六十万余部の多きに達すると云へり然れば我読売新聞に小説を掲ぐるも敢て不可なきにより来春よりは別欄を設け日々一二章づつ記者の編述したるもの或ひは欧米の小説中最も佳なるものを選びて登載し自余の小説類似の続き話は一切廃さんことを希望せり……

以上で「読売雑譚」の加藤瓢乎の一文の紹介は終るが、この方針に従って翌明治十九年より小説欄が新設された。

明治十九年一月四日（月）より連載された『鍛鐵場の主人』はフランスのジョルジュ・オネー原作の小説の翻訳で「聯画閑人記述」、つまり加藤瓢手自身の手になるものであった。これまで、雑報欄（主として三面）の中で三面記事と並んだ続きものと異り、これは二面の下段（五段目）全部を占める小説という新鮮な読みものの欄で、書出しは「千八百八十年十月中の事なりとか美麗なる猟衣装を着けたる一人の少年が仏国のジュウと云る山の中腹に生ひ茂りたる森の片蔭に休ひ……」となっている。休刊日をのぞいて三月二十日まで毎日連載された。<sup>(16)</sup>

次いで、三月二十三日より饗庭篁村の『当世商人気質』が五月二十日まで連載された。第一回では、木挽町のたどん屋で夫婦共稼ぎの山形屋萬助といふ吝嗇の商人がわずか二十年経つか経ぬに立派な質屋となった。独り子の千太郎は極端に慈悲心が深く、人に情けをかけ過ぎ、猿にまで高価な菓子を投げ与えるので親が困っている。結局、深川辺の小質屋傳助に千太郎を預け教育してもらうことになった。……という筋で、千太郎が様々の意見をうけて商人として成長してゆく様が描写されている。この第一回のストーリーをみても明らかに八文字屋の気質物を土台とした作である。

読売新聞においてはこの様にして、同年四月二十八日より『新説雨後月』、七月初旬より『人の噂』、また『彈三線縁の緒』など新しい読みものである。『小説』が続々と連載されることになった。『新聞小説』が誕生したのである。

坪内逍遙の読売新聞への寄稿はやはりこの明治十八年からのようである。五月十三日、「寄書」欄に「詩歌の改良」という題で「本郷真砂街春のや隠居おぼろ」という署名で投書したのが最初であろう。これは五月十日、浅野狂夫という人物が寄書欄で詩歌を論じたのに対して提言したもので、また本年三月序の『小説神髓』の近刊予告もかねている。「……さて文明の詩歌とは如何なる者をいふや。曰く真成の小説是なり。……文明の詩歌即ち真成の小説は専ら

写生を主髄とする活人情史即ち是なり……其詳細を知らんと欲せば請ふ近々発兌なせる拙著小説神髄を見られよ、文  
 明の詩歌と未開の詩歌と其區別灼たるにちかゝるべし……<sup>(17)</sup> というのがそれで、これまでの詩歌に代るものとして人  
 情、世態風俗を写生した小説<sup>小説</sup>を新しい文明社会の詩歌として提唱しているのである。次いで同年五月十五日、十七  
 日、十九日、六月三日に「粹の釈義」「釈教の活用」など「春のやおぼろ」の署名で投書している。以後も盛んに投  
 書が続けるが、翌十九年十月頃からは、大新聞の社説にあたる「読売雑譚」の筆者として演劇改良について論陣をは  
 っている。同年十月二十七日「演劇改良の一手段」<sup>(18)</sup>（読売雑譚）、同月二十九日「再びチヨボと傍言を論ず」（同上）、  
 同月三十日「再びチヨボと傍言を論ず（承前）」（同上）などで以後も盛んに執筆している。明治十八年からの読売新  
 聞紙上における春のやおぼろの活動をみると、前述した聯画閑人・加藤瓢乎の読売雑譚の文章（十八年十二月）にみ  
 られる小説欄の新説を指導したのが春のやであったことは明かである。そして春のやおぼろの方針の中心にあったの  
 はいうまでもなく『小説神髄』（本年九月より刊行）また『書生氣質』（六月より刊行）で発表され実践された小説論  
 であった。『書生氣質』初版の口絵に描かれた芸者が「読売新聞」を開いている姿も想起される。『小説神髄』がわが  
 国の文壇の文明開化の幕明けをした名著であること以上に、坪内逍遙がその小説論によって直ちに小新聞の元祖、読  
 売新聞の紙面にはじめて小説欄を創設したことの意味は大きい。理論の発表と社会的実践と同時に敢行した若き巨人  
 の姿に文明開化期のスケールの大きい啓蒙思想家、文教政策の実践者の面影を想像したい。

明治二十年八月には高田半峰が正式に読売新聞の主筆となった（『読売新聞八十年史』読売新聞社刊）が、これは  
 坪内逍遙の勧めによつたのだ。高田半峰自身「……一日坪内君は私に向つて『読売新聞で論説を書く記者即ち主筆が  
 欲しいといふ事であるから君一つやつて見ないか』といふ事であった。」（高田早苗述『半峰昔ばなし』昭和二年十月  
 三日、早大出版部刊「五三、読売新聞の由来」と述べている。また「……然るに坪内君は自分が援兵するといふ約

東で私に是非入社せよと勧め牛込北町の私の住居へ饗庭篁村君をつれて来て二人で頻りと酒を勧めたのである。さて私は饗庭君と酒を飲みながら話してみると江戸ッ子同士で頗る気が合ひ遂に入社の覚悟を定めたのである。」(五四、読売新聞主筆として)「斯ういふ方針が確定したので先づ坪内君に客員として入社してもらひ、更に進んで当時の青年文士中見込のある人を二三人入社せよとて頻りと物色したのである。其頃私の処に出入した人で二宮郁二郎といふ奇人があった。此人は和泉屋といふ立派な本屋の息子さんで、小川為次郎君と親しい交りがあった。……忽ちにして尾崎紅葉、幸田露伴の二君を見付け出した。両君とも当時未だ若かったけれども頗る評判の好い人であったから、入社させてはどうかといふことになった。……遂に両君を同時に聘する事にした。」(五六、唯一の文学新聞)

坪内逍遙による読売新聞小説欄の創設は他紙にも影響を及ぼして新聞小説が流行する時代を迎えた。明治二十年代の所謂紅露時代の文運の隆盛もその源は読売新聞の小説欄の改革という逍遙の文明開化の構想の中にあった。空理空論でなく、たとい知識人のひんしゆくする三面記事の続きものであっても、実際に江戸時代から世間に根付いてきた草双紙合巻風の物語を改良して新時代の小説小説として育てるといふのが逍遙の狙いであった。

#### 四 おわりに——坪内逍遙の小説観

逍遙が草双紙合巻や小新聞の続きものに好意的であったことは『小説神髓』の次の一文によっても分る。

……而して草冊子の文の如きは最も世話物に相適ひて且つ改良に便なるものなり。我が将来の小説作者はよろしく此体を改良して完美完全の世話物語を編成編成なきまく企つべし。世の活眼なき似而非学者は我が双冊子の文体をばいと鄙びたりとて罵れども、さるは小説の何たるをば解せざるに出たる謬錯のみ。小説は人情及び風俗を活るが如くに叙しいだして、読むものをして感ぜしむるを其目的とはなすものなり。仮令よしや俗言俚語ありとも、其文章

に神ありなば、他の絵画にも音楽にもまた詩歌にも恥ぢざるべき一大美術といふべきなり。因云。此間の傍訓新聞紙に掲載せる所謂統話の雑報の如きは、おほむね草冊子体の文章なれども、多少の改良を加へたるものなり。其改良の主なるものをいへば、詞のうちにまじへ用ふる京阪風の俚言を廃して専ら東京語となしたる事なり。故に此間の草冊子体は種彦文に似たるよりは、むしろ俗文体（春水文）に似たるものなり。是れ併しながら東京府の、皇国の中央となりたるより自然に出来せし変更なるべし。……（下巻、文体論、第三雅俗折衷文体、（乙）草冊子体）

草双紙合巻の文章に東京語を組み込んだ小新聞の続きものの文体を新時代の小説の文体として勧めている。ここには他の文体を説いた箇所と比べても、「小説は人情及び風俗を活るが如く叙しいだして……」と、『小説神髓』のテーマの核心が凝縮して説かれているだけに逍遙の最も集中した熱弁が感じられる。たとえ「俗言俚語」つまり、女、子供や社会の下層の賤しい職業に従事する人々のたどくしい言葉の描写文であっても、そこに人間の真心、魂がこめられていれば、立派な芸術である。『小説神髓』の文体論の中で逍遙は、江戸期以来の草双紙合巻と今、目の前に流している小新聞の続きものに最も鮮明なスポット・ライトをあてている。草双紙合巻や続きものを温かく見守り弁護している様な逍遙の態度には相当に徹底したものがみられる様である。私はこの点から、『小説神髓』その他に散見される逍遙の発言の背景、特に江戸の戯作文芸との関係について二三の点を述べて本稿を終りたい。

『小説神髓』は明治十八年三月出版の予定であったが書肆・東京稗史出版社の失敗で中絶した。その後、同年五月十三日の読売新聞に「文明の詩歌即ち真成の小説は専ら写生を主髓とする活人情史即ち是なり……」と本書の出版予告を出したことについては前述した。この様な経過で九月から分冊形式で書肆・松月堂から刊行することになった

(分冊は九冊、翌明治十九年四月まで刊行)。本書については数多くの論著があつて門外漢である私が敢えて加わることもない。たゞ、この年二月の序(「はしがき」)のある『開卷悲憤』慨世士傳(英國ロルドリットン著、日本逍遙遊人訳)が刊行されており、この序の内容の趣旨はほとんど『小説神髓』と重なっている。そして私にはこの『慨世士傳』の序の方が大いに分り易いので、この序について二、三述べてみたい。

『小説神髓』もそうであるが、この序でも、最近の稗史物語の盛行を述べ、それらがすべて「……意を勸懲に発するをば小説稗史の主眼と心得道德といふ模型を造りて力めて脚色を其内にて工夫なさまくほりするからに……」真の小説が書けない。真の小説とは「夫れ小説は美術にして詩歌の変体に外ならざる也。されば小説の主髓とすべきは人情世態のみ……」と説いている。これは『小説神髓』の「小説の主腦は人情なり。世態風俗これに次ぐ」(「小説の主眼」と同様である。たゞ『慨世士傳』の序では「人情」を描写した実例として明確に為永春水の人情本に触れて、これを絶賛している。だから分り易いのである。

おのれ久しく情史を読まねば書名も人名も忘れにたれど(作者は為永春水翁也)八幡鐘といふ書にやありけん某といへる一個の通客あり性来類なき美男子なりしが戯れに干梅の皮をとりてこれを其面に貼つけつゝわざと醜かる男となりて某といへる校書を挑みて屢々之を聘するものから此妓元米をさなかりし頃親と親との約束にて許婚せし夫ありけり斯有しかば其夫の面はいまだ見知らざれども親の遺言を堅く守りて浮たる稼業を営みながらも曾てあだなる振舞をなさず男嫌の唄女といはれて此時までは過したりしが件の通人に思はれてよりいと一切なる情にはだされ義理人情の戻りがたさに竟に其意に随ふ由をばいと物憐れに描しだせり

と述べ、右に関して勸懲の作者は「夫ならぬ夫を重ねる事己に大いに道に違へり」と罵るであろうが「是なかなか物語のまことの主旨によくかなひて人情の髓を穿ちしもの也」と評している。逍遙は更に春水を賛えて

春水翁の人情を穿つに妙なる齋にこれのみにはあらざりけり梅曆なる米八の如きもまた其例とはなすべきなり春水翁の価値かちにつきてもおのづから別論あれどもこゝには省きつされば小説に道德主義をば強ひて嵌こまむと力むる事いと至難にして不都合なるをば読者も大方に知られつべし

以上のように為永春水の人情本に具体的に触れて、この序文の眼目である「小説の主髓とすべきは人情世態のみ」を明瞭に説いている。この絶賛ぶり、愛好の様子をみると逍遙という人はよほど江戸小説・戯作がすきでこれを新時代の小説に格上げしようとしている様に思われる。『小説神髓』も右の序文と同工異曲で、人情本についてはあまり明確に書いていないが、結局はこの序文と同様に人情本をはじめとする戯作に光をあてることになつたのではなからうか。

『小説神髓』では曲亭馬琴の『南総里見八犬傳』を事例として道德優位の江戸時代の考え方一般を烈しく攻撃したために、逍遙が江戸小説・戯作全体を否定したと考える向きがある（なければ幸いであるが）が、全くそうではなくて、逆に戯作の本流である人情本や次に述べる滑稽本（両者の源は戯作文芸の元祖・洒落本である）を文芸として評価し新時代の小説シヤベクに育てようとしたのだ。「滑稽本」についても逍遙はこれを社会小説として評価し、これに基いて新しい文芸が流行することを期待している。

曲亭の如きは此種の（英雄小説の——本田注）作者中に尤なる者なり。他の一種を総称して社会小説若くは人情小説といふを得べし此種の小説は強ち脚色に骨を折らず専ら人情の隠微を穿ちて神に通せんと願えるものなり。英仏の近代に此種の物多し、我国にては式亭三馬ひとり此派中に傑出せしが……英雄好の我國の読者は三馬と曲亭とは雲泥月窟大なる廷経ある如くに思へり信に謬れりといふべきのみ……中央の文壇には社会小説に関する好尚漸く暢んとする傾きあり、彼の馬琴的人物は追ひ追ひ跡をたゝんとせり将来の文学の為祝すべきが如し（新

瀉新聞、明治二十一年一月十一日。自作『赤星屋物語』連載の予告)

やゝ時期がづれるがこれが逍遙の文芸観であろう。道徳を説き、また伝説の筋や脚色に意を用いるが、肝心の人間を、人間の心をありのままに描写しない「読本」を批判しているのである。

読本といえは寛政の改革に伴う出版条件によって洒落本が禁止され山東京伝が洒落本の筆を折って以降は最も本格的な読み物として江戸小説(戯作。逍遙は「稗史」と呼ぶ場合が多い。)界に君臨してきた。時代もの(歴史小説)優位という江戸時代の一般的な考え方もあって、当時「中本」と呼ばれた滑稽本・人情本(世話もの。現代小説。)は軽文学として読本の下位にあった。そして、中本と共にあるいは中本の更に下層に絵本の草双紙合巻があつて一般家庭から裏長屋のはし／＼にまで婦女童蒙に親しまれた。草双紙合巻は最も大量に普及した江戸文芸であつた。

ヨーロッパの小説という新しい文芸を理解しはじめた時、逍遙は江戸小説の中の滑稽本、人情本、また草双紙合巻に思い至つたのではなかつたか。儒教道徳に支配された社会の下層の一隅に多くの庶民に親しまれたこれらの戯作があつた。これこそ新時代の小説にあたるのではないか。改めて小説という観点から、また西欧市民社会の立場からこれらの戯作を見直した時、前述した為永春水や式亭三馬の評価となつたのではなからうか。また逆に言えば滑稽本・人情本・草双紙合巻を新しく見直した時、逍遙ははじめて「小説」を舶来の知識としてだけでなく、具体的に実感をもつて、また日本文化の問題として捉えることが出来たのではなからうか。『小説神髓』のテーマは、単にヨーロッパの「小説」の本質の紹介といったことではなくて、この新しい文明の光によって読本を頂点とし草双紙合巻を下層とする戯作(稗史)の序列を、江戸時代の文化の構造を逆転させることにあつた。「小説」の神髓を説くことは同時に文明開化期を迎えた「稗史」の、つまり明治の日本文学のあるべき姿を説くことであつた。この勇氣のいる革新的な大仕事を逍遙はなしとげたのである。



逍遙の小説観についてはなお別途、戯作との関係を考察したいと思っている。本稿は、今日、全国の中央紙、地方紙の朝夕刊に心ず掲載されている日本独特の新聞小説の源流をたずね、それが明治十九年正月の坪内逍遙による読売新聞の紙面の改革、小説欄の創設にあったことを説くにとどめる。逍遙は続きものを雑報欄から切離して「ノベル」として独立させたのである。文明開化のリーダーの巨星坪内逍遙の偉業をこゝに確認しておきたい。

注

(1) 『図説日本のマス・コミュニケーション』（NHKブックス、昭和六十二年六月二十日刊、山本明・藤竹暁著）による。全発行部数はブラウダやイズベスチャのような一千万部を超す巨大な党や政府の機関紙が発行されている社会主義国のソ連が世界最大であるが、しかし、今日では修正の必要がある。

なお『文藝春秋』本年四月号「大新聞は生き残れるか」によれば日本の新聞発行部数（朝刊）は「読売九百七十六万四千五百五十一、朝日八百二十五万五千九百二、毎日四百十三万二千二百二十一。ABC協会（九一年一、六月・新聞発行社レポート）」である。

(2) 『草双紙合巻から新聞小説へ——開化期文化の底流』（国文学研究資料館紀要、第14号）、『新聞小説の発生——熊本新聞を讀んで』（同、第16号）、『新聞小説の発生——東京絵入新聞を讀んで』（同、第17号）、『版木から活字へ——稿本の終焉』（国語と国文学、昭和六十三年12月号）。

(3) 日本ではじめて現れた鉛活字の新聞「横浜毎日新聞」（明治三年創刊）以来、縦、横のワックで囲まれた「欄」が出現した。活字の組版のため「欄」が必要となったのである。

(4) 五百三十四号（十一月一日）にこの記事見当らない。この号を入れれば三回連載となる。

(5) この種の雑報記事連載のはじまりは、東京絵入新聞の場合は明治八年十一月二十九日より「岩田八十八のはなし」（二回）、また熊本新聞の場合は明治十二年六月四日より「遊君おけいの伝」（二回）であった。

(6) 「仮名読新聞」第一号は明治八年十一月一日刊。本局は横浜本町六丁目七十三番地、編輯兼印刷人は神奈垣魯文。明治十

年五月三日「かなよみ」と改題。読売新聞、東京絵入新聞と本紙が所謂、小新聞である。

(7) 「新聞小説の発生——東京絵入新聞を読んで——」(国文学研究資料館紀要第十七号)。

(8) 明治九年九月十二日に「此間から大評判のあった浅草御蔵前片町の……」と記事が出ている。この新聞得意の絵入り雑報で、高橋おでんが寝ている男を馬乗りになって刺し殺す挿絵が一面下段中央に掲げられている。但し単独の記事で続きものにはならなかった。

(9) 翌日は月曜日で休刊。

(10) 古川魁雷(ふるかわいらい)(安政一年々明治四十一年)は二世為永春水(染崎延房)の弟子で岡本起泉、饒庭篁村とともに三才子とよばれた。二世春水の「金之助のはなし」に続いてこの作品が発表されたことに注目したい。

(11) 国文学研究資料館紀要、第17号。

(12) 魁雷子の別号。

(13) はじめ「仮名読新聞」として明治八年十一月一日創刊。本局、横浜本町六丁目七十三番地。編輯兼印刷人は神奈垣魯文である。明治十年五月三日、「かなよみ」と改題。

(14) 加藤紫芳(しほう)。本名、瓢乎(ひょうや)。安政三年八月二十日〜大正十二年七月二十七日没。美濃大垣の生れ。藩校、敬教堂に仏語を学び、十五歳の頃上京、読売新聞入社。明治二十二年読売退社、大阪朝日入社。以後、関西において文筆活動に従事した。(日本近代文学大事典)

この文章は、高田知波氏が「小新聞の文学——大衆文学の端緒」(『国文学』昭和63年6月号)で紹介され、新聞小説欄の独立を考える上での重要さを指摘しておられる。管見では新聞小説研究の上ではじめて現れた卓見であり傾聴に値する。高田氏の新聞小説研究を含む新しい近代文学研究の発展に注目すると同時に、江戸文化からの流れの把握を意図する拙論がいささかでもお役に立つことがあればと思っている。

(15) 雄松堂の『Pinus』32号(平成3年12月10日刊)に小玉齋夫氏が「絵入週刊新聞『イリュストラシオン』」なる一文を寄稿しておられるのを興味深く読んだ。我国の安政の大地震をパリの読者に伝える程の国際的活動をしているこの絵入週刊紙に注目したい。また、『東京絵入新聞』の発生などについても海外の新聞との関係を考え直さねばならないと思っている。

(16) 明治十九年五月、単行本『修羅浮世／鍛鐵場主人』として出版。巻末に『虚無党形氣』近刊予告の二葉亭四迷自筆広告があった。

- (17) シャク。あきらか（明）。
- (18) 無署名だが、続稿の署名により春のやの筆と思われる。
- (19) 「俗言は自然の言なり……当時の情態を写せる稗史は俗言を用ひずして綴るは難かり此事丁寧に論辨して小説神髓の下巻にあり今うるさければ再びいはず……」（『妹と背かどみ』自序、明治18年12月9日筆）と言うのもこの部分を指す。
- (20) 『春暁八幡佳年』全六編（為永春水作、歌川国直、静斎英一画。天保七、九年刊）か。